留学生との交流授業が日本人に与える影響と意義

池谷 知子
神戸松蔭女子学院大学文学部
Author's E-mail Address: tikeya@shoin.ac.jp

The Value of the Joint Instruction with International Students At Kobe Shoin Women's University

Tomoko IKEYA
Department of Japanese Language and Culture, Kobe Shoin Women's University

Abstract

日本語を母語としない日本語学習者（留学生）にとって、日本人との交流授業が有効であることは知られているが、留学生との交流が日本人学生にどのような影響を与えるのかということはあまり明らかになっていない。なぜなら留学生がキャンパスにいることが、本当に「国際化」を促しているのかはなかなか検証しにくい問題であるからである。
キャンパス内にいる留学生と授業を通して交流することが、自然に多文化共生を学ぶ機会となり、日本人学生の意識の内側から「国際化」を促していることを確認していく。また、それは学年が上がるごとに強くなっており、キャンパスの国際化に対して、海外へ学生を送り出す以上に、日常生活で様々な文化的な背景をもった留学生と交流し意見を交わすことが、大きな役割を果たしていることをデータからみていく。

It is widely known that the Joint Instruction with Japanese students is effective for Japanese Learners, however, little is known about the influence on the Japanese students who experienced the interactions with international students. This understatement also represents the difficulties in measuring to what extent "internationalization", in the true sense of the word, takes place by the presence of international students on campus.
The purpose of this study is to clarify the propelling effect of internationalization for the Japanese students who had the opportunity to study with international students in their classrooms. This study also highlights the fact that the continuing personal development of Japanese students can be brought about by campus diversity in Japan, not only by sending them abroad. The data shows that

Journal of the Faculty of Letters, Kobe Shoin Women's University, No. 5（March 2016）, *55–70*.
神戸松蔭女子学院大学研究紀要文学部篇 No. 5（2016 年 3 月）, *55–70*.

internationalization of Japanese students can occur, even if they are in Japan, through immersion in multicultural settings by interacting with international students in classrooms and daily campus life.

キーワード：日本語教育、日本人学生、異文化理解、交流授業

Key Words: Japanese education as a second language, Japanese students, cross-cultural education, joint instruction (=visitor session)

1. はじめに

2008 年に文部科学省によって、当時 12 万人程度だった国内の留学生を、2020 年までに 30 万人まで増やすという「留学生受け入れ 30 万人計画」打ち出された。それに伴い、キャンパスの国際化が急速に唱えられるようになり、様々な大学で色々な取り組みがなされはじめた。ただ、一口に国際化といっても、研究者レベルのもの（学術交流、研究者の海外の送り出し、海外研究者の受け入れ）から、学生に関わるもの（学生の海外への送り出し、留学生の受け入れ）まで、その方向性は様々である。

ネウスプトニー（1982）では、外国語学習の視点から、学習言語の母語話者とのインターアクションは外国語学習において効果的であり、そのことが、教室の場面を実際のコミュニケーションの場面に近づけることを指摘している。

このように、日本語を外国語として勉強する日本語学習者（大学内における留学生）にとって、日本人との交流授業が有効であることは既に指摘されているが、ここでは、留学生との交流が日本人学生にどのような影響を与えるのかということを分析することを目的とする。留学生がキャンパスにいることが本当に「国際化」を促しているのかはなかなか検証しにくい問題であるからだ。

キャンパス内に留学生がおり、彼らと授業を通して交流することが、自然に多文化共生を学ぶ機会となり、内側から日本人学生のマインドの「国際化」を促していることをアンケートの分析を通して確認していく。

日本語を外国語として勉強する日本語学習者のすべてが「留学生」ではないが、本稿では、大学のキャンパスという限られた場における日本語学習者を対象とするため、ここでは「留学生」と表すことにする。

2. 神戸松蔭女子学院大学における日本語日本文化研修の概要

神戸松蔭女子学院大学では毎年、7 月の 2 週間、海外の協定大学で日本語を学ぶ学習者を対象として、「日本語日本文化研修」を行っている。このプログラムは通称「日本語サマープログラム」と呼ばれおり、学内で広く認知されている。2015 年は 7 月 9 日～ 7 月 23 日にかけて、イギリス、中国、台湾、韓国、インドネシアからの五カ国 23 人の留学生が、本学が主催する日本語プログラムに参加した。

学生の国籍と人数と日本語のレベルは以下のようになっている。

表 1　日本語日本文化研修に来た学生の国籍と日本語レベル

国籍	男子学生	女子学生	合計	日本語レベルの傾向
インドネシア	1	1	2	初級～中級
韓国	0	2	2	上級
中国	0	3	3	中級～上級
イギリス	6	4	10	初級～初中級
台湾	2	4	6	中級～上級
合計	9	14	23	

同じ国籍でも個人の日本語のレベルは異なるため、日本語レベルはあくまで傾向である。ただ、このプログラムに参加する学生のほとんどが日本語能力試験の N1 を持っている国もあれば、そのほとんどが日本語をはじめて数ヶ月の学生が大半だという国もある。

このように、同じ日本語学習者といっても、学んでいる国も学習者の母語も目的もレベルも様々である。そのため、このプログラムは様々な学習者に対応できるように、一般的な教科書を使ったレベル別に学習を進めるスタイルではなく、タスク型による日本語学習スタイルを採用している。

留学生は、日本語のコースが始まると各自調べたいテーマを 1 つ決め、それに関連する質問を 5 ～ 6 問作り、日本人学生を相手に 4 つの異なったクラスでアンケート調査を行う。そして、その後、それをポスターにまとめ発表する。留学生はその過程で、アンケートに使う言葉や発表に使う言葉などを学んでいく。留学生によるアンケートは日本人学生との交流授業の中で実施され、2015 年は 4 回の交流授業が行われた。

これまでのテーマの例としては「日本人の結婚観」「好きな本」「余暇の使い方」「日本人の好きなお祭り」「就職について」「ペットについて」「携帯の使用状況」「お酒の飲み方」など様々であった。

タスクシラバスのため、23 人の学生はレベル別ではなく、国を均等にした 2 つのクラスに分けられる。各クラスには日本語教師がつき、アンケートの作成から発表まで、サポートやアドバイスを行う。最初は、日本語がおぼつかない留学生も交流授業の回を重ねるごとに、だんだん日本語がスムーズ出てくるようになり、質問に対する答えの聞き取りもよくなっていく。こうして、集めたデータを元に発表用ポスターと原稿を作成し、コースの最終日には、日本語でポスタープレゼンテーションを行う。

また、すべての留学生には日本語パートナーと呼ばれている、ボランティアで留学生を助ける日本人学生がつき、宿題の手伝いや、話し相手になるといった日本語に関する手助けの他、一緒に見学旅行に行ったり、ホームステイ先に留学生を送り届けたりと、プログラム全般の運営に関する手助けも行っている。

2015 年日本語日本文化研修のプログラム概要は表 2 のようになっている。一般的には留学生と日本人のどちらかがビジターとして行われる授業は「ビジターセッション」「交流授業」と呼ばれる事が多いが、本学では日本人の学生も留学生との授業がシラバスの中に組み込ま

表 2　2015 年日本語日本文化研修のプログラム概要

2015年度神戸松蔭日本語日本文化研修　日程　　7月

	月	火	水	木	金	土	日
				9	10	11	12
午前				関西空港に到着	日本語授業(1) ｸﾗｽA：Rm.71C ｸﾗｽB：Rm.71D 合同授業(2) Rm. 1221 田附クラス	ホームスティ	ホームスティ
午後				オリエンテーション @ジャパンスタディーセンター 歓迎会	歓迎礼拝 パートナーと顔合わせキャンパスツアー ホームステイ準備Rm. 1221 ホームステイへ　出発		
	13	14	15	16	17	18	19
午前	日本語授業 (3) ｸﾗｽA：Rm.71H ｸﾗｽB：Rm.71J 合同授業(4) Rm.743 池谷クラス	日本語授業 (6) ｸﾗｽA：Rm.71H ｸﾗｽB：Rm.71J 合同授業 (7) Rm.1241 藤井クラス	日本語授業(8) 発表の型 ｸﾗｽA：Rm.71H ｸﾗｽB：Rm.71J 日本語授業 (9) ｸﾗｽA：Rm.71H ｸﾗｽB：Rm.71J	合同授業(10)Rm.724 森クラス 日本語授業 (11) ｸﾗｽA：Rm.71C ｸﾗｽB：Rm.71E	合同授業(12)Rm.1221 山極クラス 日本語授業 (13) ｸﾗｽA：Rm.71C ｸﾗｽB：Rm.71E	課外活動：大阪市内 10:20　六甲道 11:00　大阪城公園 大阪城見学 13:20　大阪城公園 14:30　デザインポケット	パートナーと計画をたてて一緒に出かける
午後	お礼状書き　Rm,1221 日本文化(5)　Rm.742 お礼状＆川柳	華道	課外活動：神戸 14:50　校門に集合 15:45　お箸作り 17:00　生田神社	書道			
	20	21	22	23			
午前	日本語授業(14) ｸﾗｽA：Rm.71H ｸﾗｽB：Rm.71J 日本語授業(15) ｸﾗｽA：Rm.71H ｸﾗｽB：Rm.71J	発表準備(16)(17) Rm. 1241 松蔭会館にて	自由行動	関西国際空港から帰国			
午後	発表準備　Rm. 1221	発表(16:00－18:00) 歓送会(18:00－19:00) @大学会館	帰国準備				

（数字）は日本語授業の回数を表記

れており、どちらも「お客様」ではない。双方が一緒に授業を行うという意味が強いため、合同授業という名前で呼ばれている。留学生は 4 回の合同授業を行うが、日本人学生は 4 つのクラスが 1 回ずつ合同授業を行う。

ただ、「合同授業」という名称を使うと、15 回すべての授業を留学生と日本人学生が合同で行うようなイメージが強い。そのため、「合同授業」という名称を使うと、誤解を招く恐れがあるため、本稿ではあえて一般的な名称である「交流授業」という名称を使用する.

このような事情のため、日本人学生に対して行われたアンケートの中で使用された語句や、プログラムのスケジュールには、本学における呼び名である「合同授業」という名称が使われていることを先に述べておく。

なお、当初、スケジュール上は 5 回の交流授業を予定していたが、2015 年は 1 回、台風で休講になったため、全 4 回の交流授業となった。

3. 調査の概要

留学生との交流授業は以下のクラスで 7 月に行われた。各クラスの人数は以下のようになっている。3 つめの日本語教授法応用 A のクラスのみ 2 クラス開講されているので、2 つのクラスの合同の人数になっている。

①『日本語入門』23 人

②『日本語教授法基礎 A』15 人

③『日本語教授法応用 A』36 人（2 クラス）

まず、留学生を 11 グループに分け、日本人も同じグループ数に分ける。そして、留学生対日本人が 2 対 2 や、3 対 2 のようにグループで交流授業を行う。1 対 1 にしなかった理由として、留学生と日本人の人数が同じではないのと、双方の学生の性格（内気であったり、初対面だと上手くしゃべれない等）や留学生の日本語能力の問題で、1 対 1 だとコミュニケーションが続かず、お互いが気まずい事になる場合がある。それをできるだけ回避するため、グループでお互いに助け合うことができるように、グループでの交流授業を行っている。

交流授業の後、7 ～ 9 月にかけて交流授業に参加した日本人学生 74 人にアンケート調査を行った。本学は女子大学であるため、被験者はすべて女子学生である。アンケートは対面で行い、教師がアンケート用紙を配布して行い、すぐにその場で回収した。各クラスとも人数が異なるため母数が異なる。そのため、数字は実数とパーセントの両方で表すことにする。パーセントは小数点第一位で切り捨てを行った。

3.1　アンケート調査を行った日本人学生について

各クラスについて、人数だけではなくもう少し詳しく説明をしていく。

①『日本語入門』23 人・・・・・・日本語日本文化学科の 1 年生の必修科目

②『日本語教授法基礎 A』15 人・・日本語教員養成課程の 2 年生以上の必修科目

③『日本語教授法応用 A』36 人・・日本語教員養成課程の 3 年生以上の必修科目

以上、3 レベル、合計 74 人である。一つ目の『日本語入門』は日本語日本文化学科の現代日本語専修の学生の必修科目である。この他の『日本語教授法基礎 A』と『日本語教授法応用 A』は、日本語教員養成課程を履修している学生にとっては必修科目であるが、日本語教員養成課程は任意で登録する課程のため、これを履修している学生は、少なからず留学生に興味のある学生である。つまり『日本語入門』の学生だけ、選択の余地がないまま、交流授業を受けることになる。

2 つ目の『日本語教授法基礎 A』は先にも述べたように日本語教員養成課程の必修科目になっており、日本語日本文化学科、英語学科の両方の学生が受講している。2 年生以上が対象なので、その多くが、2 ～ 3 年生であるが、1 人だけ 4 年生が混じっていた。

3 つ目の『日本語教授法応用 A』も同じく日本語教員養成課程の必修科目になっており、日本語日本文化学科、英語学科の両方の学生が受講している。原則として『日本語教授法基礎 AB』を履修した学生が受ける授業となっている。3 年生以上を対象としているため、3 ～ 4 年生の学生しかいない。『日本語教授法基礎』と『日本語教授法応用』は 2 クラス開講であり、学生は自分の都合の良い時間の授業を受講するようになっている。

日本語教員養成課程は必修 16 単位と選択必修 12 単位の全部 28 単位で構成されている。本学ではすべての学科の学生が日本語教員養成課程を受講できるシステムになっており、毎年、多くの学生がこの課程を履修している。2 年生以上の学生がこの課程に登録ができ、2015 年 12 月現在、113 人の学生がこの課程を履修している。

毎年、日本語教員養成課程を修了した学生の中から、卒業後に中国の北京外国語大学へ 2

人を 1 年間、アデレード大学へ 1 人を半年間、日本語の TA（ティーチングアシスタント）として派遣するシステムが整っており、日本語教育を学ぶ学生のモティベーションとなっている。

3.2　調査内容

本学では 1 年生から 4 年生まで多くの学生が日本語教育に興味をもち、留学生との交流授業を毎年行っているのであるが、それが日本人学生にどのような影響を与えているのかを検証したことがなかった。本稿は 4 年間の大学生活の中で毎年、留学生と交流することが日本人学生にどのような影響を与えており、学年が上がるに従って、どんな内的変化が起こっているのか（あるいは起こっていないのか）を調査することを目的とする。

アンケートは紙媒体で授業中に配布し、その場で回収した。アンケートは無記名で行われ、学生の個人情報には十分配慮し、誰がそのアンケートに答えたかは分からないようにして行った。アンケートの設問は 13 問によって構成されている。

まず、設問だけ確認する。

＜設問＞

説問① 何年生ですか

設問② 何学部ですか。

設問③ 留学生との合同授業は何回目ですか？

設問④ 海外旅行に行ったことがありますか？（修学旅行・家族旅行を含む）

設問⑤ 2 週間以上の海外留学をしたことがありますか？

設問⑥ 普段の生活で留学生（外国人）との交流はありますか。
（ネットでの交流含む）

設問⑦ 問⑥で「時々ある」「よくある」と答えた人にお尋ねします。その留学生（外国人）とはどのような関係ですか。

設問⑧ どうしてこの授業をとっていますか？

設問⑨ 合同授業に参加して、よかったと感じた点はどんなところですか。

設問⑩ 合同授業に参加して、やりにくいと感じた点はどんなところですか。

設問⑪ 合同授業に対してどう思いましたか。

設問⑫ 合同授業に参加してみて、何か考え方が変わりましたか。

設問⑬ また、留学生と合同授業をしてみたいですか。

次の 4 章でそれぞれの設問に対する回答をみていく。4.1 節で全体的な傾向を確認し、その後、4.2 節で学年があがるごとの変化を確認する。

4.　結果

今回のアンケート調査は 74 人の日本人学生に対して行われた。まず、設問と回答を確認しながら、全体的な傾向を概観し、次に学年別の傾向を確認していく。

4.1　全体的な傾向

4.1 節では、それぞれの設問と回答の全体的な傾向をみていく。

設問① 何年生ですか　　設問② 何学科ですか

①と②は学生の基本的な属性を確認するための設問である。今回、1 年生が 23 人、2 年生が 8 人、3 年生が 36 人、4 年生が 7 人だった。学科は日本語日本文化学科 53 人、英語学科 20 人であった。また、本学は女子大であるため、性別はすべて女性である。2 年生が少ないのは、2 年生が多い日本語教授法基礎のクラスの 2 つ目のクラスが台風で交流授業がキャンセルになったため、その後のアンケートが実施できなかったためである。

設問③ 留学生との合同授業は何回目ですか？

③は留学生との交流授業（合同授業）の回数を確認する設問である。学年が上がれば、必然的に増えていくと予想されるものである。回答は、1 回 39%（29 人）、2 回 24%（18 人）、3 回 19%（14 人）、4 回 6%（5 人）、5 回 8%（6 人）、6 回 2%（2 人）であった。日本語日本文化学科の学生であれば、1 年次に交流授業を体験しているため、2 年次には 2 回目になる学生が多い。一方、英語学科の学生は 2 年次から日本語教員養成課程を取り始めるため、2 年次で 1 回目を経験する学生が多い。よって、1 回目という回答が一番多くなっている。

設問④ 海外旅行に行ったことがありますか？（修学旅行・家族旅行を含む）

いいえ　　はい（　　）回 場所（　　）

設問⑤ 2 週間以上の海外留学をしたことがありますか？

いいえ　　はい（　　）回　場所と期間（　　）

④と⑤は海外の経験を問う設問である。最近は帰国子女が増加し、高校時に留学する学生や修学旅行で海外に行く学生も増えてきているため、実際に本学の学生の中にもそのような学生がいるのかどうか確認しておく。留学生との接触に肯定的な感情をもつ学生の傾向として、海外への渡航回数が関係あるかどうかも考察すべき問題であると考えたからである。海外旅行は回数と場所、留学の場合はそれに加えて期間も尋ねた。

まず、海外旅行経験について述べる。海外旅行に行ったことがない学生が 38%（28 人）、行ったことがある学生が 63%（46 人）であった。回数としては 1 回が 21%（16 人）で最も多く、中には 10 回以上という学生も 5%（4 人）いた。国としては韓国や台湾、中国、タイ、マレーシア、シンガポールなどアジアの国が多かったが、ハワイ、グアム、カナダなど英語圏も人気があった。

特筆すべきこととして、海外旅行経験が 4 ～ 5 回あっても、すべて韓国という学生が何人かいた。K-POP の人気など最近の韓国ブームの影響だと考えられる。

次に、留学経験について述べる。留学をしたことがない学生は 78%（57 人）、留学をしたことがある学生は 21%（16 人）だった。16 人中、日本語日本文化学科の学生は 3 人で、英語学科の学生は 13 人だった。英語学科には 4 ヶ月の中期留学が必須になっているコースがある

ため、そこに所属する学生はすべて留学する。それ以外にも夏休みや春休みに行われる一ヶ月の語学研修に行ったことがある学生もかなりいた。一方、日本語日本文化学科の学生の留学先はフランスであったり、チュニジアであったり、変わった留学先がみられた。留学回数として最も多い学生のデータは、3 年生で 4 回（イギリス（オックスフォード）半年、オーストラリア 3 週間、アメリカ 2 週間、イギリス（ウェールズ）2 週間）の海外留学を経験した英語学科の学生であった。

設問⑥ 普段の生活で留学生（外国人）との交流はありますか。
（ネットでの交流含む）
全くない　あまりない　時々ある　よくある（週 **1** 以上）
設問⑦ 問⑥で「時々ある」「よくある」と答えた人にお尋ねします。
その留学生（外国人）とはどのような関係ですか。（複数回答可）
（　）大学関係の友達（日本語パートナー、他大学・サークルを含む）
（　）大学以外の友達（趣味、習い事、日本語ボランティア）
（　）アルバイト先
（　）留学など海外で知り合った友達
（　）**SNS** などネットでの友達
（　）その他（　　）

⑥と⑦は普段の生活での外国人との交流や接触を問う設問である。交流といっても最近は、LINE や facebook といったインターネット上の繋がりもあるため、それも含めた留学生（外国人）との接触を確認する。同時にその人とどのような人間関係にあるのかも見ていく。全く接触がないと答えた人は 42%（31 人）、あまりないと答えた人は 19%（14 人）、時々あると答えた人は 23%（17 人）、よくある（週 1 以上）と答えた人は 15%（11 人）だった。「全くない」と「あまりない」という回答をあわせて 62%（46 人）になるので、半分以上の学生は普段、外国人と接触することがないことがわかる。一方で、「時々ある」と「よくある（週 1 以上）」という学生も 38%（28 人）おり、一定数の学生は普段から外国人（留学生）と接触していることが分かる。

この 38% の学生がどのような外国人（留学生）と接触しているのかというと、大学関係の友達（日本語パートナー、他大学･サークルを含む）が 15%（11 人）、大学以外の友達（趣味、習い事、日本語ボランティア）が 5%（4 人）、アルバイト先が 8%（6 人）、留学など海外で知り合った友達 4%（3 人）、SNS などネットでの友達が 2%（2 人）、その他が 8%（6 人）であった。回答が複数回答になっているため、総数は 38% と一致しない。

その他の回答として、親の知人や親戚が国際結婚をしている等の家族間の交流に起因するものが多かったが、旅先の友人や去年のこの日本語日本文化研修でできた友人という回答も 1 人ずつみられた。意外にも、「留学など海外で知り合った友達」をあげている学生が少なかった。

設問⑧ どうしてこの授業をとっていますか？（複数回答可）

（　）必修だから
（　）日本語や日本語教育に興味があるから
（　）日本語教員養成課程の修了証書がほしいから
（　）以前、留学していたことがあるから
（　）留学に興味があるから
（　）国際交流に興味があるから
（　）その他

⑧はなぜ、この授業をとっているかを聞く設問である。1 年生は必修なので答えがわかっているが、2 ～ 4 年生がなぜ、この授業をとっているのかを知るためである。これは複数回答可としたので、いくつ答えても構わない。1 人で多くの回答を選んだ学生もいるが、1 つだけの学生もいた。「必修だから」だけを単独で選んだ回答は 14%（11 人）だった。「日本語や日本語教育に興味があるから」だけを単独で選んだ回答は 8%（6 人）だった。「日本語教員養成課程の修了証書がほしいから」だけを単独で選んだ回答は 6%（5 人）だった。そのほかの学生 51 人はすべて複数回答をしていた。つまり多くの学生が複数回答を選んでいる。最も多い組み合わせは、「日本語や日本語教育に興味があるから」「日本語教員養成課程の修了証書がほしいから」「国際交流に興味があるから」の 3 つの組み合わせで 13%（10 人）の回答だった。

設問⑨ 合同授業に参加して、よかったと感じた点はどんなところですか。
設問⑩ 合同授業に参加して、やりにくいと感じた点はどんなところですか。

⑨と⑩は自由記述になっている。この交流授業に期待する役割の 1 つとして、外国に興味があるが、語学（主に英語）ができない、何を話したらいいのか分からないという学生が、母語である日本語を通して異文化交流することができることを知ってもらうことがある。そして、多くの留学生が日本に興味を持っていることや、言葉に頼らないコミュニケーションが可能なことを体験してもらい、外国や外国人に対するイメージを変えることである。

⑨の良かった点として多くあげられたのは以下のような内容だった。

●今まで外国人と交流する機会があまりなかったが、交流できてよかった。
●留学生が日本のどういう点に興味があるのかということが理解できた。
●留学生とも共通点があることがわかった。
●もっと外国語を勉強しようと思った。
●日本語を教える難しさがわかった。

⑩のやりにくいと感じた点として多くあげられたのは以下のような内容だった。

●日本語があまりできない人とは意思疎通が取りにくかった。
●自分には話を続けるコミュニケーション力がないと感じた。
●簡単な言葉に言い換えるのが難しかった。
●こちらの意見が伝わっているのかどうか分からない。

●あまり積極的ではない人と話すとき大変だった。

やりにくい点を見てみると、ヨーロッパ系の学生で日本語があまりできない学生と話す時、困難を感じた学生が多いようだった。それは日本人学生のせいというより、日本語を勉強してまだ数ヶ月の学生の日本語レベルがあまり高くない場合、内容をコントロールできないタスク型の活動は、お互いの言いたいことや聞きたいことが上手く伝わらず、会話がブレイクダウンを起こす可能性が高い。日本語のレベルが高くない学生が、タスク型の活動を行う難しさが表れた結果となった。

一方で、自分自身の積極性やコミュニケーション能力が足りないことを反省している日本人学生も多かった。留学生と日本人の会話のグループは 20 分ごとに交替するようになっている。自分たちとは上手く話せなかった留学生がとなりのグループに移動して、上手く話が続いているのを見たりすると、自分と何が違うのか考えるきっかけになるようである。

設問⑪ 合同授業に対してどう思いましたか。（複数回答可）

おもしろい　たのしい　世界が広がった　びっくりした　どきどきした
普通　嫌だ　苦手だ　むずかしい　恥ずかしい　困った　あわない

回答の多い順に並べると以下のようになった。肯定的な答えをしている学生が多く、「嫌だ」「あわない」を選んだ学生は 0 人だった。日本人学生は留学生との交流に難しさを感じた場合もあったようだが、留学生との交流そのものに関しては肯定的なイメージが多かった。

楽しい	57 人
たのしい	56 人
世界が広がった	32 人
どきどきした	18 人
むずかしい	18 人
困った	12 人
恥ずかしい	9 人
びっくりした	7 人
苦手だ	3 人
普通	2 人

設問⑫ 合同授業に参加してみて、何か考え方が変わりましたか。

⑫も自由記述になっている。この交流授業に期待する役割の 1 つとして、留学生と交流することで、異文化や多文化へのハードルを下げる日本人学生への心理的な影響がある。また、自分自身の母語である日本語という言語や日本文化を見直してもらう機会にしてもらいたいと思っている。

多かった意見は次のようなものだった。

●自分の文化について知る必要性を感じた。

●日本語をもっと勉強しようと思った。

●外国語をもっと勉強しようと思った。
●留学生は別世界の人間だと思っていたが、話してみると違った。
●日本語教育に興味が出た。
●どうやって話せば通じるか考えるようになった。
●世界が広がった。
●他の国の人とコミュニケーションを取ることに対して前向きになった。

肯定的なコメントが多い中、「異文化をありのままに受け入れることの難しさを改めて感じた。これから日本にもたくさんの外国人が入ってくると思うが、私は果たして彼らを全面的に受け入れるのだろうかと疑問を感じた。どちらかというと怖いと思った」といったコメントも見られた。

設問⑬ また、留学生と合同授業をしてみたいですか。

（　）全然　したくない
（　）あまり　したくない
（　）ちょっと　してみたい
（　）ぜひ　してみたい

⑬は交流授業に対する最終的なイメージに関わってくる問題である。多い順に並べると以下のようになった。

1 位　せひ　してみたい　79%（58 人）
2 位　ちょっと　してみたい　19%（14 人）
3 位　あまり　したくない　1%（1 人）
4 位　全然　したくない　0%（0 人）

「ぜひしてみたい」「ちょっとしてみたい」だけで 74 人（97%）もおり、ほとんどの学生が交流授業に肯定的であった。設問⑪、設問⑫で留学生との交流に対して困難さや怖さを感じていると回答している学生でも、次回、交流授業をすることに対しては積極的な答えであった。

4.1　学年別グループの傾向

これから『日本語入門』1 年生、『日本語教授法基礎 A』2 年生以上、『日本語教授法応用 A』3 年生以上の 3 つのグループにわけて、そこで見られる傾向を見ていくことにする。その目的として、1 年生から順に学年が上がっていくにつれて、どのような変化が起こっているかを検証するためである。先にも述べたが、『日本語入門』のみが日本語日本文化学科 1 年生の必修科目であり、学生の希望にかかわらず履修している科目である。その他の『日本語教授法基礎 A』『日本語教授法応用 A』は日本語教員養成課程の必修科目であるが、日本語日本文化学科だけではなく、英語学科などの他学科の学生も履修することができる。また、たとえ、日本語日本文化学科の学生であっても、日本語教育に興味がなければ、これらの科目は取らなくても良い。以下、データを検証していくが、数字が分かりやすいように極だったボリュームの部分にはグレーで網掛けをしておく。また、注目してほしい数字には太枠でマークする

ことにする。

表 3　設問③ 留学生との合同授業は何回目かという問いに対する答え

	1 回目	2 回目	3 回目	4 回以上
日本語入門 23 人	86%（20 人）	4%（1 人）	4%（1 人）	4%（1 人）
日本語教授法基礎 15 人	47%（7 人）	47%（7 人）	6%（1 人）	0%（0 人）
日本語教授法応用 36 人	5%（2 人）	28%（10 人）	34%（12 人）	34%（12 人）

学生が上がるごとに、交流授業の経験回数が増えていくが、1 年生でも高校などで交流授業を経験したことがある学生が 1 人いた。それが、3 年生以上の日本語教授法応用になると、半数以上の学生が 3 回目以上の経験となっている。最も多い合同授業の経験回数は 6 回で、日本語教授法応用のクラスに 2 人いた。

表 4　設問④ 海外旅行に何回いったことがあるかという問いに対する答え

	0 回	1 回	2 回－3 回	4 －5 回	6 回以上
日本語入門 23 人	47%（11 人）	17%（4 人）	21%（5 人）	4%（1 人）	8%（2 人）
日本語教授法基礎 15 人	26%（4 人）	46%（7 人）	26%（4 人）	0%（0 人）	0%（0 人）
日本語教授法応用 36 人	40%（14 人）	22%（8 人）	20%（7 人）	8%（3 人）	11%（4 人）

学年が上がるごとに海外旅行経験はやや増加傾向にあるが、海外旅行に行ったことがないという学生が日本語入門で 47%、日本語教授法応用で 40% であるので、それほど大きな違いがあるわけではない。6 回以上、海外旅行にったことがある学生は、日本語入門のクラスで 8%、日本語教授法応用のクラスで 11%である。

ここからわかることは、大学生になったからといって、学生達は頻繁に海外に行くわけではないということだ。ただ、10 回以上行ったという学生が日本語入門に 1 人、日本語教授法応用に 3 人おり、大学生になって海外旅行に積極的に行ったり、家庭環境として海外に良く行くのであろうと推測されるグループがいる。

表 5　設問⑤ 2 週間以上の海外留学の経験が何回あるかという問いに対する回答

	0 回	1 回	2 回－3 回	4 －5 回	6 回以上
日本語入門 23 人	95%（22 人）	0%（0 人）	4%（1 人）	0%（0 人）	0%（0 人）
日本語教授法基礎 15 人	73%（11 人）	20%（3 人）	6%（1 人）	0%（0 人）	0%（0 人）
日本語教授法応用 36 人	68%（24 人）	28%（10 人）	2%（1 人）	2%（1 人）	0%（0 人）

2 週間以上の海外への留学経験は日本語入門の学生ではほとんどいない。学年が進むにしたがって、大学での春期や夏期に行われる語学研修などに参加する学生や、英語学科のプロフェッショナルコースに属する学生は、4 ヶ月の留学が組み込まれているため、留学経験者が多くなる。

3 年生以上を対象とした日本語教授法応用における海外留学に行ったことがないという 0 回の学生は 68% であったが、その中の日本語日本文学科の学生のみを対象とすると海外留学の未経験者は 91% であった。つまり、1 年次の日本語入門の 95% からあまり変化がないことがわかる。日本語日本文学科に限っていえば、ほとんどの学生は留学をすることなく学生生活を過ごしていると言えるだろう。

表 6　設問⑥　普段の生活での留学生（外国人）との接触率の問いに対する回答

	全くない・あまりない	時々ある・よくある
日本語入門 23 人	86%（20 人）	13%（3 人）
日本語教授法基礎 15 人	73%（11 人）	26%（4 人）
日本語教授法応用 36 人	50%（18 人）	50%（18 人）

それぞれのグループの差が最も出たのが、設問⑥の普段の生活での留学生（外国人）との接触率に対する回答だった。日本語入門では接触が少ない人が 86% であって、留学生と日常的に接触がある人は非常に少ない。これが、学年が上がるごとに留学生との接触率が増えてきており、日本語教授法応用のクラスで、接触率が少ない人が 50% 、多い人が 50% になっており、ついに半分半分になっている。海外旅行や海外留学の経験はほとんど増えていないのに、外国人・留学生との接触率だけは劇的に増えているのである。これは何を表しているだろうか。それには次の設問⑦が鍵となる。そのような外国人・留学生と接触しているのかということを尋ねる問いである。

表 7　設問⑦ 問⑥で接触の多い留学生（外国人）とはどのような関係かという問いに対する回答。

	大学関係	大学以外	バイト先	留学	ネット	その他
日本語入門 3 人		1 人				2 人
日本語教授法基礎 4 人	3 人				1 人	1 人
日本語教授法応用 18 人	8 人	3 人	6 人	3 人	1 人	3 人

それぞれの人数が少ないため、パーセント表示は行わない。また、複数友人がいる場合を想定して、複数回答にしているため、回答した人数と答えの数は一致しない。

日本語入門で最も多かった関係が「その他」で、親の知人が 2 人で、大学以外の友達（趣味、習い事、日本語ボランティア）などが 1 人だった。それに対して、2 年生以上は大学関係の友達が増えてくる。つまり、1 年生は親の知り合いなど受動的な関係が多かったのが、学年があがると自分自身からの能動的な知り合いが多くなっていく。また、上級生にはバイト先という答えが多かった。留学生がいることを気にせずその職場を選び、一緒に職場で働いている学生が多いことがわかる。また、日本語ボランティアなどの大学以外の接触も学年が上がるにつれて、若干、増えて行っている。

ここで注目したいのは、3 年生以上を対象とした日本語教授法応用の学生で、留学生と接

触が多いグループ 18 名の属性である。海外旅行の経験がない人が 44%（8 人）、ある人が 55%（10 人）、海外留学経験がない人が 72%（13 人）、ある人が 27%（5 人）であった。このデータだけみると、海外経験の有無と日常的な外国人との接触率はあまり関係がないようにみえる。

また、反対に留学先の人間関係を維持している人が意外にも少ないこともデータの中から見え隠れしている。海外留学経験が 1 回以上ある学生 12 人の外国人・留学生との接触率を見てみると、接触が少ない人が 7 人、多い人が 5 人であり、外国人との接触が少ないという答えの方が多かった。

どうしてこのような結果になったのか、その理由を考察してみる。接触の多いグループの学科の内訳をみてみると、日本語日本文化学科が 12 人で、英語学科が 6 人であった。留学経験の少なさは日本語日本文化学科の学生が多いことに起因すると思われる。

また、留学生接触率であるが、大学関係が多いことからも、この時期、交流授業をした留学生の日本語パートナーをしている学生がかなり含まれていることが予測される。

ただ、回答の中に去年の日本語パートナーとまだつながりがあって、LINE やメールなどでやりとりしているという答えがあった。日本語でのやりとりは日本人学生からすると、言葉の壁が少なくストレスがないため、すぐに返事がしやすい。また、プログラムが終わって帰国した留学生は、日本語を使う環境が維持でき、教科書にはない生きた日本語を学ぶ機会になり、日本語を学ぶモティベーションを維持できるという双方にとって良い影響がある。別の可能性として、もしかしたら、留学経験がない学生の方が、学内での留学生との触れ合いを求めているのかもしれない。

アンケートを行った交流授業の対象となっている授業を履修している理由を聞いてみると以下のような数字となった。複数回答可になっているため、母数が異なっている。

表 8　設問⑧　交流授業を行ったクラスを履修している理由を聞く問いに対する回答

	日本語入門 23 人	日本語教授法 基礎　15 人	日本語教授法 応用　36 人
必修だから	21 人	7 人	14 人
日本語や日本語教育に興味があるから	7 人	8 人	25 人
日本語教員養成課程の修了証書がほしいから	6 人	7 人	31 人
以前、留学していたことがあるから	1 人	0 人	1 人
留学に興味があるから	4 人	3 人	2 人
国際交流に興味があるから	5 人	6 人	17 人
その他	0 人	0 人	0 人

これをみると、選択権のない日本語入門は「必修だから」という答えが多くなっているが、同じ必修でも日本語教員養成課程を選択した上の「必修」である上の学年は、日本語教育に興味があり、日本語教員養成課程の修了書のためだと意識している学生が多いことがわかる。また、国際交流に興味がある学生も多い。留学に興味がある、留学をしていたという理由を

あげた学生はごく少数だった。

この設問は複数回答可であるが、回答者によって、1つしか選んでいない学生と、多くの理由を選んでいる学生がいた。そこで、日本語教授法応用で、外国人・留学生接触率の少ないグループと、多いグループにおける履修の動機の数を比較してみた。

表9　設問⑧ この授業を取っている理由の回答

	全くない・あまりない 18 人	時々ある・よくある 18 人
理由が1つ	5 人	2 人
理由が2～3つ	10 人	13 人
理由が4つ以上	3 人	3 人

あまり大きな違いはないが、接触が多い人の方が1つの理由ではなく、複数の理由からこの授業を受けている傾向がある。1年生の日本語入門の調査では、理由が1つでかつ、「必修だから」を選んだ学生が半分以上もいたので、上級生の方が能動的に授業を履修していると言えるだろう。

表10　設問⑬ また、留学生と合同授業をしてみたいかという問いに対する回答

	全然 したくない	あまり したくない	ちょっと してみたい	ぜひ してみたい
日本語入門 23 人	0%（0 人）	4%（1 人）	26%（6 人）	69%（16 人）
日本語教授法基礎 15 人	0%（0 人）	0%（0 人）	20%（3 人）	80%（12 人）
日本語教授法応用 36 人	0%（0 人）	0%（0 人）	14%（5 人）	86%（31 人）

最後に、交流授業をまたしてみたいかという問いであるが、日本語入門には1人、「あまりしたくない」という回答があった。この日本語入門は日本語日本文化学科の1年生にとっては必修科目であって、選んで選択したクラスではない。そのため、留学生との交流が大変だった場合、苦手に感じる学生がいても不思議ではない。実は、アンケートを実施する前は、日本語入門では、「全然したくない」「あまりしたくない」という否定的な回答が、もっと多いと予想していた。そのため、予想よりも少ないが、交流授業が苦手な学生もいることが確認できた。

日本語教授法基礎、日本語教授法応用と学年があがっていくにつれて「ちょっとしてみたい」「ぜひしてみたい」という回答が増えていくのだが、「ぜひしてみたい」という最も積極性が高い回答も、学年があがるごと 69% → 80% → 86% というように高くなっていく。

5. まとめ

最後にこれまでの考察をまとめていく。本稿は留学生との交流授業が日本人学生にどのような影響を与えているのかを検証することを目的とした。また、大学の4年間の中で、日本

人学生の外国人に対する意識がどのように変化し、それが日常生活での留学生・外国人と接触にどのように反映されているのかを 1 ～ 4 年生のすべての学年にアンケート調査を行うことで検証した。

1 年生は外国人や留学生との接触がほとんどなく、あったとしても親などの知人であるなど、自分から得た人間関係ではない事が多かった。また、授業の性格上、仕方がないことであるが、「日本語入門」を取っているのは「必修だから」という消極的な理由が多かった。また、留学生との交流に対して苦手意識をもつ学生も見られた。

それに対して、履修者が 2 年生以上の「日本語教授法基礎」になると、大学の中の日常生活で留学生と接触することが増加していく。また、授業を選択する理由として、日本語や日本語教育を意識した者が多くなっている。

そして、履修者が 3 年生以上の「日本語教授法応用」になると、大学の中の繋がりはもちろんであるが、大学以外での日本語ボランティアなどでの留学生との接触や、アルバイト先でも外国人と接触する学生が多くなり、留学生との交流授業に対して積極的な学生が多くなる。その一方で、留学生と接触が多い学生が必ずしも、海外旅行や海外経験が多い学生ばかりではなかった。そこからわかることは、キャンパスの中という普段の環境の中で多文化共生を体験することが、日常生活における外国人との接触増加に繋がっているということである。また、留学生にもわかる日本語で交流することが、文化や言葉の壁を乗り越え易くし、相手への興味や交流への積極性を促すことがわかった。

何をもって国際化とするのかは非常に難しいが、海外へ留学する人数を増やすことだけを目指すのではなく、留学生と交流することを積極的に楽しみ、自分のアルバイト先やクラスに外国人や留学生がいることを当たり前のものとして捉え、日常的に彼らと意見を交わすことを楽しいと考えるマインドが、日本人学生の内側からの国際化には大切なのではないだろうか。

参考文献

1. 岩井朝乃（2006）「日本人学生の『文化的他者』認識の変化の過程－多文化クラスでの異文化接触体験から－」『異文化間教育』23 号　異文化間教育学会　pp.109-124

2. 永井涼子（2012）「日本語授業におけるビジターセッションの取り組みと意義－日本人学生・留学生双方の視点から」『大学教育』9 号　山口大学　pp.53-62

3. ネウスプトニー. J. V（1982）『外国人とのコミュニケーション』岩波新書

4. 藤井桂子（2006）「留学生との交流が日本人にあたえる影響－交流グループに所属する日本人学生の事例分析－」『横浜国立大学　留学生センター研究論集』17 号　pp.136-173

（受付日 : 2015. 12. 10）